

2009年9月29日

「科学」は間違える筈がないという信仰  
—物理学会「物理学者の社会的責任」集会での「情けない議論」—

槌田 敦

2009年9月26日、物理学会秋期大会(熊本)で、「物理学者の社会的責任」という集会が開かれた。ここで議論されたのは、来年3月に開かれる春の大会で、上記の名前でシンポジウムを開くことであった。

司会者は「核と平和」を話題にしてシンポジウムの講師を選びたいと提案した。これに対し、私はその前に「物理学者の社会的責任」という課題で、今、求められている問題を列記し、それらを比較検討すべきではないか、と述べた。そして①地球温暖化、②日本の核武装、③原発の安全性、④風力など自然エネルギーという虚構、という4つの話題を挙げて、物理学者の見解が求められている。これらに物理学者として答えることが「物理学者の社会的責任」を果たすことであると述べた。

そして、「CO<sub>2</sub>25%削減」が緊急で最重要であるとし、物理学会誌に掲載されることが確定した槌田論文(掲載日未定・添付資料)を配り、「人為的CO<sub>2</sub>で温暖化したのか、それとも温暖化したからCO<sub>2</sub>濃度が増えたのか」が物理学者に問いかけられている。これに答えることが物理学者の責任を果たすことであると述べた。

これに対して、会場からCO<sub>2</sub>温暖化問題を取り上げることに多数の反論があった。その反論内容を列記すると、

- ①気象は複雑で、物理学が取り扱える対象ではない、
- ②これまでに、何回もこの話題を取り上げた。繰り返してもムダ、
- ③槌田に対抗できる発言者は物理学会にはいないから、シンポジウムにはならないなどの発言が続いた。

そこで、私は、気象学は回転を伴う重力場での熱学であり、物理学の一分野である。国際政治はCO<sub>2</sub>削減で動いている。ここで、責任を果たすとは、物理学者への問いかけに、物理学者として答えることであるが、これがなされていないと答えた。槌田に対抗できる人が物理学者の中にいないという問題では、気象学者などから援軍を求めればよいことである。

会場は、憎々しげに大声を張り上げる人達で満ちていた。「今まで、槌田に耐えてきた。もう聞きたくもない」という発言もあった。このような状況では、会場にいた中間派の人達によるいくつかの発言もこの会場の雰囲気をとりになすことにはならなかった。

この集会で、諸法則に対する物理法則による支配としての「物理学帝国主義」から、「物理学」は間違える筈がないという「物理学(者)帝国主義」への変質を感じた。これは、ノーベル賞を含む偉い物理学者の言うことが槌田らの言うことに比べて正しいに決まっている、とする信仰である。ところが、この「物理学(者)帝国主義」はCO<sub>2</sub>温暖化説に対する槌田らの新説、つまり「温暖化が原因で、CO<sub>2</sub>濃度増加はその結果」に有効な反論ができていない。このイラダチが会場での憎しみとなって現れたものと思える。

これ以上会場にいてもむだなので、私は「最後に一言。皆さんの意見は物理学者の責任放棄である」とだけ述べ、退席した。「責任放棄した人達が物理学者の責任を語ることはマンガである」と言いたかったのだが、言わずもがなであり、やめることにした。